新連載

津軽・黄金崎農場通信

雪をかきわけてのニンジン収穫。新たに経営陣に加わった4人の若者たちの活躍が楽しみな春です

農事組合法人黄金崎農場理事 木村慎一

私どもの農事組合法人黄金崎農場は、青森県の最西端、西津軽郡深浦町に拠点農場を置く共同経営方式の農場です。平成7年は、380haの作付けで、まだ最終決算が出ていませんが、売上げは4億8000万円ほどが見込まれています。今年は、小麦、ダイコン、バレイショなどを併せて400ha以上の作付けに挑み、5億円以上は確保したいものと、いま張り切っています。

また昨年までの20年間、代表の佐々木君夫（46）、竹内雅孝（45）、それに私の3人で農場を運営してきましたが、このほど180haの農地を新規取得したのを契機に、従業員（周年雇用者をこう呼ぶ）であった4人（いずれも30代）を新たに経営陣に加え、7戸の共同経営体として体制を充実しました。

北国の農業は、寒さ、風、それに雪との闘いがあります。しかし一方、こうした厳しく、しかも気まぐれな気象条件を克服して農業生産をやり遂げたときの喜びは、至上のものです。

日本海や、世界自然遺産の白神山地、あるいは津軽の秀峰といわれる岩木山（1625m）などの大自然が周囲をめぐる農場の四季を織りまぜながら、これから数回にわたって、私たちの大型農業経営に賭ける様子を報告します。

春・大地との闘い始動

日本海に面した深浦町は、対馬暖流が沖を北上しているため、青森県内では南隣の岩崎村とともに最も早く春がやってきます。それでも、今冬は、寒さが厳しく、いつもより春はゆっくりと農場にやってきました。事務所から見える白神の山々も白い服をまだ容易に脱ぎそうもありません。4月3日には、この時期では例をみないほどの雪が降りました。

しかし、どんな気象になろうと、知恵を出して作物を安定生産するのが、農業に携わるものの役目です。4月上旬、深浦町の本場（小作地を含めて耕作地は8ヵ所にあり、事務所周辺の農地を「本場」という）では、雪と冬の寒さに耐えた50haの小麦が、まだ冷たい北風にも負けまいとして伸び始めています。

心配した雪腐れ病もほとんどみえず、生育は順調です。まもなく1回目の追肥を行ないます。トラクタにブロードキャスターをつけて、2日ほどで一気に済ませます。「大型農業機械を駆使する」――これがこの農場発足時の私たちの夢でした。それを実現させているのです。

またいまは、越冬させた契約ニンジン10haの収穫の真っ最中でもあります。残念ながらメーカーサイドによる完全な機械掘り体系が確立されていません。そこで、農場オリジナルの機械で土ごと浮かせてから、人力で掘り上げています。降雪などのときは、なかなか大変ですが、チームワークをよくし、効率のよい作業に努めています。

3月下旬から始めたニンジンの収穫は、4月半ば頃まで続きます。昨年は全国的に過剰となったせいもあって、ニンジン市場は大崩れしましたが、農場のニンジンは契約栽培で、それほど安値には泣かされません。大手メーカーの健康飲料の原料として供給しており、毎日大型トラックがメーカーの加工場めざして農場から出発しています。

私たちはこのニンジンだけでなく、主力のダイコン、バレイショとも契約栽培をベースにした経営展開を行なっています。この契約栽培を確実にやりとげてきたこと、これが今日の黄金崎農場をつくりあげたと確信しています。確実な収支を見通せた経営ができたということです。契約栽培といえども、毎年価格変動の影響は若干受けますが、それでも市場競争だけにさらされている農産物よりは安定した収入が得られるのです。

畑では、ニンジンの収穫をしていますが、この4月始めという時期は、まだ14台もあるトラクタが畑を疾駆していません。本格的な作業に備えて、農場に働く若者たちは機械の保守点検に全力をあげています。

新規取得地はまだ雪の中

一方、深浦町から60㎞ほど離れた標高300mの岩木山麓（弘前市十腰内地区）にある、昨年新規取得した180haの畑は、この時期まだ一面雪野原です。しかし、1m以上もの積雪の下には100haにわたって、小麦がその生命力で茎葉を伸ばしはじめているはずです。

3月下旬、私たちはここに、ブロードキャスターで肥料成分として有効な融雪促進剤を散布しました。広大な雪原でトラクタを乗り回す気分は何とも言えません。すぐ間近に見上げる雪を抱いた岩木山には、神々しさを覚えます。こんな雄大な景色をすぐ近くで見られることは、自然の中で農業をやっている者の特権といってもよいかもしれません。

それにしても、この畑は昨年初めて耕作したのですが、石の多いのには閉口しました。プラウもかなり傷めました。この近くの農地を借りた経験があったので覚悟はしていましたが、これほどとは思いませんでした。そのため、昨秋、石拾い機を見つけるためにドイツに行ったほどなのです（あいにく、希望するような石拾い機がなかったので、購入はしませんでした）。

そんなところに、植えた小麦だけに、根がなかなか素直に伸びなかった恐れがあります。さらにそれに加えて今冬は例年より積雪量が多く、完全な雪解けは4月いっぱいかかるとみなければならないでしょう。そうなると、小麦が腐敗する雪腐れ病の発生が心配されます。そこで、融雪剤の登場となった次第です。

なお、畑の石対策として、ドイツ旅行の際に知り合った人を通じて、スウェーデン製のプラウに

トラクタで浮かし掘りした後、雪と土をかきわけて契約もののニンジンを収穫する。なによりもチームワークが決め手だ

優れているものがあることを知り、この一年、テストしてみることになりました。1日10haはいけると聞いていますから、これで、大きな石をものともせず、深耕作業の効率が高まれば、しめたものです。なにしろ、畑作は深耕がキーポイントになりますから。

さらなる夢に向かって

実は、私たちはこれまで借地主義をベースにしてきました。昭和51年、深浦町に新規入植したときに31haの農地は取得しましたが、その後はできるだけ、借地で規模拡大を図ってきました。しかし、さらなる大規模で立体的な農業展開をしよう という夢に向かって、平成7年春にこの岩木山麓の180haの農地を取得したのです。

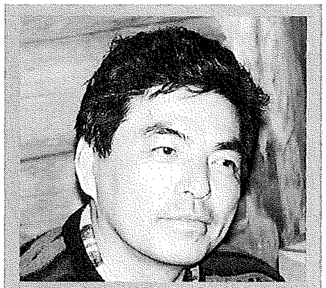
ここでは当面、黄金崎農場の基幹作物である小麦、バレイショ、ダイコンの作付けをベースにしますが、この先、製品加工への進出のほか、観光農業の展開も視野においています。すぐ近くには、プリンス系のゴルフ場やスキー場があり、しかも弘前市から日本海沿いの津軽国定公園に向けての幹線道路沿いにも位置しているのです。この立地条件を見逃すことはないと考えています。

果樹園や、小動物の放し飼い、あるいは咲き乱れるお花畑など、魅力的な農業ランドを都市住民に解放できると考えています。この岩木山麓での新たな夢づくりには、農地取得資金も含めて7億円ぐらいの大投資が必要となります。慎重に収支を見極めながら、5年計画ぐらいで進めていくことにしています。いま、雪に覆われているこの山麓の大地に、いつか多くの人々が憩う姿を想像することは実に楽しいことです。そしてそれが実現すれば、もっと楽しいに違いありません。

今年の作付計画は6月の総会で最終確認しますが、冒頭で述べたとおり400haを超えるとみています。この規模になると、農場開設時からスクラムを組んだ私たち3人の管理運営ではどうにもなりません。それだけに、昨年新しく法人の構成員になった4人の若者たちの活躍が楽しみです。

4人のうち、女性の佐藤里美(31)は経理部門を担当しているため農作業に従事することはありませんが、七戸剛(37)、伊藤禎(36)、秋田谷光広(32)は7人の従業員と35人の臨時雇用者たちをリードしながら、率先してトラクタを乗り回すことになります。また、従業員の主力も20代、30代の若者たちです。

いま、彼らが黄金崎農場の農作業を引っ張っています。若い活力のある農業の世界が、そこにあります。当然のことながら、こうした若い人達が安心して永続的に働けるようにするのが私たちの役目です。自己責任のもとに、間違っても倒産などすることのないような経営管理が必要です。そのためには、常に情報収集のアンテナを高くしておかなくてはなりません。外国の動きもキャッチする必要があります。私が担当する加工ダイコンも、中国の動きを抜きには語れない時代になりました。経営者がきちんとした見通しをもち、それに応えて若者たちが思う存分働く――そんな農場づくりが、少しはできてきたのかな、と思うこのごろです。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立